SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

地域遺産に対する川崎市民の保全意識の形成に関する考察：地域のエコミュージアム化に関する研究その4 -

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 宏之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/8684

日本建築学会大会学術講演梗概集
（中　国）1999年9月

地域遺産に対する川崎市民の保全意識の形成に関する考察
—地域のエコミュージアム化に関する研究　その4—

正会員○石川宏之*1
同　　大原一興*2

■はじめに■

1960年代後半にフランスで発祥したエコミュージアムは，多様な地域遺産[1]を住民参加によって保全・活用し，生涯学習の場として地域づくりをすすめる博物館である。日本でも，近年環境学習やまちおこしと連動したエコミュージアムが試みられつつある。本研究は，博物館活動における環境保全の一つの手法としてエコミュージアムに着目し，地域遺産に対する住民の保全意識の実状について明らかにすることを目的とする。

■研究方法と調査概要■

対象地は市民と行政とのパートナーシップにより「多摩川エコミュージアム構想」[2]を推進している川崎市を対象地とした。調査手順として，まず予備調査において川崎市民が保全したい地域遺産を把握するために2つの市民団体を交えて45カ所の遺産の選定をおこなった。つぎにその地域遺産に対し川崎市民の認知・訪問と保全意識について1998年11月に郵送によるアンケートをおこなった。[3]なお対象者は，川崎市在住の成人900人を1998年10月1日現在の住民基本台帳に基づき層化二段無作為抽出したものである。市民の有効回答数は215（回収率；23.8%）であった。

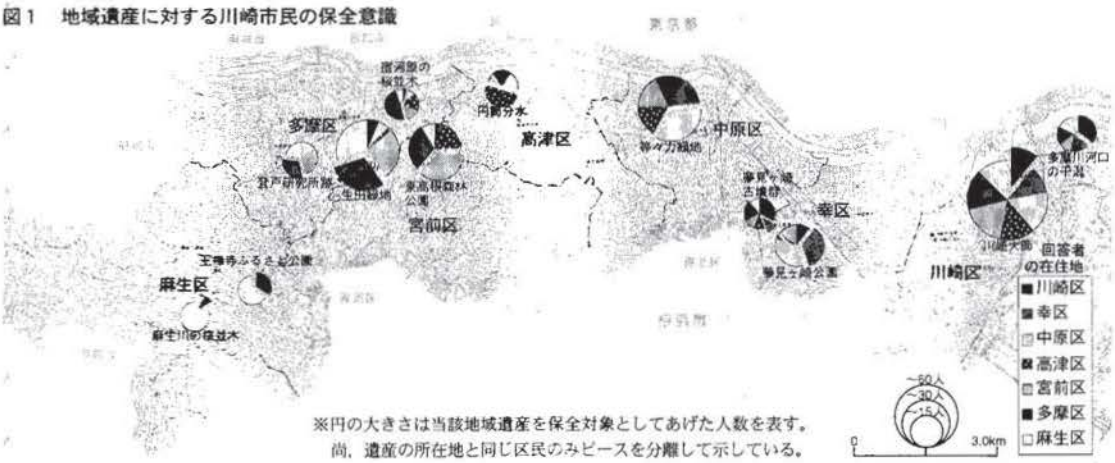
■市民の保全意識とその保全理由■

図1は市民の保全意識が高いもの[4]から順に12箇所をあげ，それぞれの回答者の在住区の内訳を示したものである。回答者数でみると川崎大師が最も多く，つぎに生田緑地，等々力緑地など自然遺産が続く。図2から地域遺産をカテゴリー別に分け保全意識の高いものから順に並べその横に認知者数と訪問者数を示したものである。まず自然遺産の保全理由についてみると，全般に「市民に広く親しまれている」割合が大きい。また文化遺産をみると全体的に「歴史的価値がある」の占める割合が大きいが，川崎大師については「市民に広く親しまれている」割合も大きい。これから地域遺産に対する市民の保全意識を高めていくには，市民に広く親しまれる価値観を地域遺産に見い出すことが必要であると思われる。

■地域遺産に対する訪問と保全意識との関係■

図2から保全意識と訪問との関係を自然遺産についてみると全般的に訪問者数が多いものは保全意識も高い。しかし文化遺産の中には訪問者数が多いものに対して保全意識も高いとは必ずしも言えない。図3と4は地域遺産に対する市民の認知や訪問と保全意識について「▲文化遺産」・「◆産業遺産」・「●自然遺産」別に示したものであるが，認知者・訪問者数と保全意識者数とも多いものに等々力緑地や生田緑地などの自然遺産が多くみられる。さらに訪問者数と保全意識者数の関係をみると，「登戸研究所跡」[5]は図の左端に位置し，訪問したことはないが保全意識を持つ人のいることを示しており，多くの人々にその価値が認められているものである。一方，「川崎市役所本館」や「向ヶ丘遊園北口駅舎」は日常生活において身近な存在であるが，訪問したことはあっても保全意識を持たない人が多い。表1から訪問と保全意識との相関係数を調べてみると0.8135で強い相関がみられ，地域遺産に対し市民の訪問者数が多ければ保全意識も高いことがわかる。また図1から保全意識者の在住区の内訳をみると川崎大師は市域全体に及んでいるが，等々力

図1　地域遺産に対する川崎市民の保全意識



A Study on the Relationship between Inhabitants' Recognition and Heritage Conservation
—Study on Planning of Ecomuseum　Part4—

ISHIKAWA Hiroyuki and OHARA Kazuoki

緑地はその所在する自地区住民の占める割合が大きい。また図5から45カ所の遺産に対し保全意識を持つ住民の占める割合[6]をみると，全般的に遺産の所在地と同じ地区の住民がそれを保全対象としてあげる傾向にある。

■まとめ■

保全意識の高い地域遺産とその訪問者は，以下の通りである。

① 保全意識の高いものは自然遺産であり，その訪問者の多くは自地区住民である。

② 保全意識を高めていくには，市民に広く親しまれる価値観を地域遺産に見い出すことが必要である。

③ 保全意識は，訪問と強い相関関係にあることから地域遺産を訪れることで芽生えると思われる。ただし「登戸研究所跡」のようなものは訪問によらず情報や教育により保全意識が形成されており，このことからも保全意識の低い遺産対しては市民に広く親しめる教育的プログラムを実施することも重要であろう。

謝辞

本研究を進めるにあたり多摩川エコミュージアム構想関係者の方々にご助力を仰ぎました。ここに記して感謝の意を表します。なお本研究の一部は平成10年度笹川科学研究助成によっておこなわれたものである。

註

(1) 本稿では地域の動植物財が生息している生態系を自然遺産，人々が培ってきた社会生活に関わる動的・不動的財や無形財を文化遺産，特にその中で産業界の発展の証拠となる動的・不動的財を産業遺産とし，以下それらを総称して地域遺産と記す。

(2) 「多摩川エコミュージアム構想」は，多摩川とその流域の特性にふさわしい水と緑をいかし，うるおいとやすらぎのある快適なまちづくりをめざし，神奈川県川崎市が策定したものである。

(3) ここでは保全意識を捉えるため45個所の地域遺産の中から「守り・伝え・広めていきたいもの」を3つまであげてもらった，訪問と認知については45個所全てについて「訪れたことはある」と「知っているが訪れたことはない」を記してもらった。

(4) 各地域の遺産について「守り・伝え・広めていきたいもの」に対する回答者数の多いものほど「保全意識が高い」とした。

(5) 大平洋戦争時にそこで化学兵器の開発が行われた所である。

(6) 自地区住民の保全意識＝（遺産の所在地と同じ地区の住民でそれを保全対象としてあげた人数）／（遺産の所在地と同じ地区の住民数）

他地区住民の保全意識＝（遺産の所在地と異なる地区の住民でそれを保全対象としてあげた人の総数）／（遺産の所在地と異なる地区住民の総数）

図2 地域遺産の保全理由（複数回答）

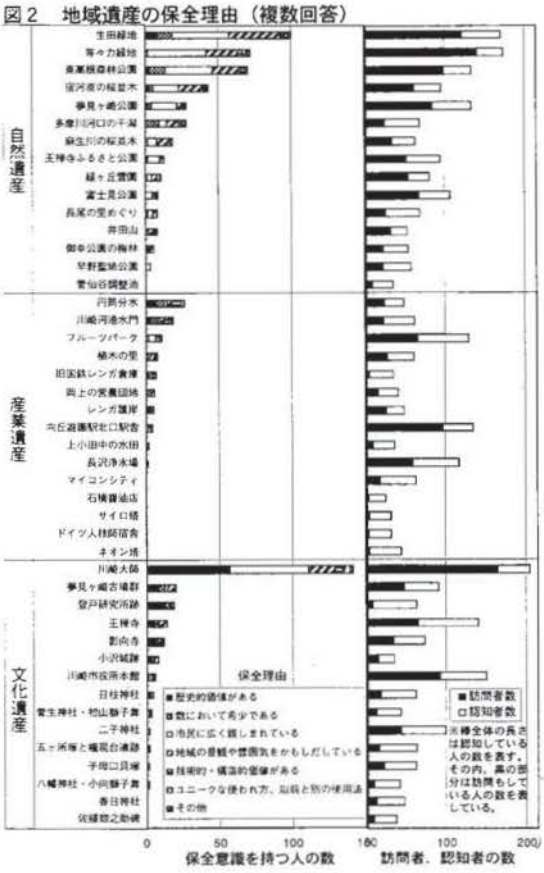


表1 認知・訪問・保全意識の相関

	認知	訪問	保全意識
認知	1.0000		
訪問	0.9668	1.0000	
保全意識	0.7337	0.8135	1.0000

図3 地域遺産の認知と保全意識

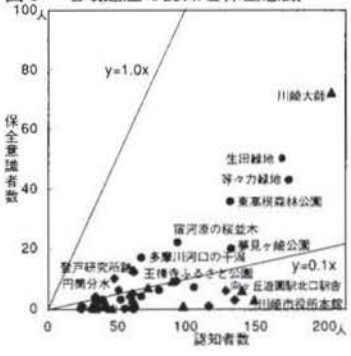


図4 地域遺産の訪問と保全意識

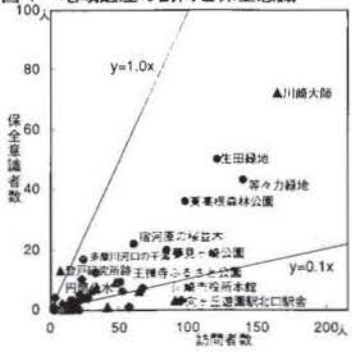
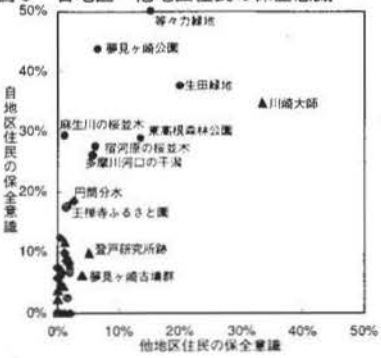


図5 自地区・他地区住民の保全意識



＊1 横浜国立大学大学院博士課程・工修 Graduate School, Yokohama National Univ.M.Eng.
＊2 横浜国立大学工学部助教授・工博 Assoc. Prof., Yokohama National Univ. Dr. Eng.